講演＋シンポジウム「〈日本〉都市の制度と社会・文化」

【開催の趣旨】

都市化は、都市の秩序を維持するための規律・規範を創出し、新たな法規と規制方法を展開させた。それは一方で、規制・規範への包摂・馴致を促すとともに、他方で、統制からの逸脱、規制に対する反逆、規範への背反を生じさせた。すなわち都市化は、“犯罪”・“非行”の増大、“不良”少年の増加、都市“暴動”の発生といった事態を生じさせた。こうした現象には、必然的に社会・文化的な要因が刻印されており、したがってそれらは、「制度」と「都市」のかかわりを解明するための格好の素材たり得る。

また、都市化は逆に人々の間に都市への背反と都市からの離脱願望を醸し、アウトロー＝自由人への憧れを生み出した。たとえば都市化が進行した時期は、股旅ものの主人公であるやくざが、小説・映画などを通じて社会の底辺に生きる人々＝大衆の共感を呼び、大衆文学を生み出していった時期にあたる。制度化された秩序への反逆、権力への怒りといった要素を、そこに読みとることは容易である。

以上のような問題関心のもと、第Ⅰ部の講演では、現代（戦後）の日本に焦点をあてて、文学研究・映画研究の角度から「股旅もの」と「やくざ映画」に迫る。つづいて第Ⅱ部のシンポジウムでは、アメリカからの研究者も迎えて、戦前日本における「不良少年」・「ヤクザ」・「任侠文化」の実態を可視化し、それを通じて1920年代前後の時期の都市空間と政治秩序・社会意識の構造を解明する。